

XenosagaI・II - 第四話 宿縁 - Beziehung - 下

フィッティングルーム

モモ: KOS-MOS さん、ぐっすり寝てますね。

シオン: ーこうして見ていると、彼女が起きていたことが、夢だったみたい。

モモ: え? どういう意味ですか?

シオン: ううん、なんでもないのー

ブリッジ

シオン: あ、ハイパースペースへ入るところね。

モモ: 安定するまで、ブリッジにいきましょう。

マッシュズ: そうしててもらえると、助かるな。おい、ハマー、そっちはどうだ?

ハマー: コラムパルス、受信良好っす。

マッシュズ: よっしゃ、ゲートインだ、トニー!

トニー: アイサー!

惑星プレロマ

ペレグリー: 実験の失敗で、惑星が消滅ーそれも、住民ごとー

マーグリス: たかが 15 億ー物の数ではなかろう。

ペレグリー: 無辜の民よ。私たち U-TIC 機関にとっても、もっとも尊重すべきものでしょう。

マーグリス: 尊重ーなにを? 博愛主義は壇上でぶってくれ。

たしかに実験は失敗だったが、エミュレーター回収の手は打ってある。

いざとなれば、オリジナルを使うことも厭わん。

要は結果が得られるまで、繰り返せば良いだけのことだ。

ペレグリー：――――

マーグリス：良心が我慢ならんといった顔をしているな。

ならば、おまえ自身がすべてを公表し断罪を待てばよいではないか。

ペレグリー：――あなたこそ。

マーグリス：卑賤の輩どもにこの俺が？ 笑わせるな、断罪を下す場所に立っているのは、我々なのだ。

それとも――ペレグリー、貴様はこの十四年の間に我らの目的を忘れたとでもいうのか。

ペレグリー：――――

オペレーター：マーグリス司令！

マーグリス：なんだ。

オペレーター：先遣隊の生存者から報告！

部隊は壊滅、ゾハルエミュレーターの確保に失敗したとのことです。

マーグリス：ゾハルの所在は――？

オペレーター：不明ですが、グノーシスに奪取された可能性が高いとのことであります。

マーグリス：――そうか。474 特務艦隊に通達、プラン 31 の可能性もありうる。

当該宙域にて、別命あるまで待機させておけ。

オペレーター：はっ。

ペレグリー：（――――

ジン、あなたがこの場にいれば、私たちをどう思うのだろうか――）

曙光

緋い外套の男：ヴィルヘルムさま、KOS-MOS から報告です。

シオン・ウヅキ、アレン・リッジリーの両名は、

KOS-MOS とともに、民間船に収容されたそうです。

ヴィルヘルム：――そう。

緋い外套の男：交戦域に船籍不明艦が接近中です。その存在を考慮するならば、むしろ幸いかと――

ヴィルヘルム：仮にそれが彼女の脅威となるのであれば、KOS-MOS は護る。――そうなんだよね。

緋い外套の男：はい、すべての指令よりも優先させて。

ヴィルヘルム：いずれにせよ、KOS-MOS を引き上げさせたのは、賢明さ。
軍にも彼らにもこれ以上、奉仕する必要はない。
ラインの乙女に関するデータも、揃ったしね。
すべての事象は、この秩序の羅針盤が指し示す通りに動く。後は――
必要な因子[ファクター]をそろえて、もうひとつが目覚めるのを待とうよ。

エルザ 

トニー：航行きわめて順調！ さ、もう安心だぜ。
マッシューズ：さてと、落ち着いたとなったら、次はあれだな――
シオン：あれ――？
マッシューズ：おい姉ちゃん、さっきロボ姉ちゃんが窓にヒビ入れてくれたろ。
シオン：は、はい。申しわけ――
マッシューズ：あれ帳消しにしてやるから、頼まれてくれねえか？
シオン：なんでしょう？
マッシューズ：頼む、メシ作ってくれ！

食堂

シオン：じゃあ、いただきま〜す。
全員：いっただきま〜す！
シオン：どう、なかなかのもんでしょ。
アレ：美味しいですよ、主任！
トニー：ああ、いけるぜー！
マッシューズ：そんな馬鹿な！ こんな女のメシ、美味い訳が――
――――
――――
――――おかわり！
ケイオス：船長、言ってることが逆だよ。
マッシューズ：うるせい、俺のメシの邪魔するな。――水！

シオン：はい。

ケイオス：かいがいしいね。

シオン：そう？　うちではこれくらい普通だったのよ。

暇さえあれば本ばかり読んで、他はな一んにもしないダメ兄貴がいたせいもあるけど。

ケイオス：（あの人、家ではそんなだったんだ）

シオン：ん、なにか言った？

ケイオス：いいや、船長もトニーもハマーも、お兄さんがうらやましいんだろーなーと思ってね。

トニー：もちろん！

ハマー：うらやましいっす！

アレン：ほ、僕もです！

シオン：可哀想ーま、男所帯だからしょうがないか。

’’ハマー’：そうなんすよ、うちは残酷なまでに男所帯で、メシもまずいったらありゃしない。

モモ：ーごめんなさい。モモはそういうこと、うまくできなくてー

トニー：いいの、いいの！モモちゃんは、これからいろいろ覚えてく時間がたっぷりあるんだから。

はやくいい女になって、そしたら俺とデートしような！

シオン：いままで、ご飯は誰が作ってたの。

トニー：当番制ーとはいっても、誰が作ってもまずいのは一緒。

ケイオス：もっぱら食べるだけの人が約一名いたけどね。

マシューズ：水！

アレン：あのー

マシューズ：ついでにおかわり！

シオン：はいはい、急ぎます。

でも、このカレーって、オリジナルは第二ミルチアの店なんですよ。

トニー：へえ、そりゃ向こうにつくのが楽しみになってきたぜ！

アレン：あ、あのー

ケイオス：シオン、くわしいんだね。

シオン：私、第二ミルチアに実家があるの。さっきのダメ兄貴も、そこに住んでるのよ。

アレン：主任ーあのー

シオン：アレンくん、真っ赤になってどうしたの？

アレン：これーからくて、僕にもー水ー

シオン：あ、ごめん。気づかなかった。

モモ：きゃあ！

シオン：ア、アレンくん！

アレン：だ、大丈夫です～～。

アレン：ふう――

シオン：大丈夫、アレンくん？

アレン：え、いやあ、もう平気ですよ。すみませんでした、主任が作ってくださったもので――
僕、どうも昔から辛いものが苦手でした――

シオン：言ってくればよかったのに。ちゃんと、お子様用のレシピもあるのよ。

アレン：お、お子様用――はあ――
――で、主任。どうするんですか、これから？

シオン：そうねえ、明日の朝食の仕込みもやっちゃいたいところね。

アレン：いや、そうじゃなくて――

シオン：冗談よ、わかってます。
でも、どうするって言っても、KOS-MOS、放っておけないでしょ。勝手に動いてるのよ、あの子。

アレン：あ～あ、ヴォークリンデでの起動試験が終わったら、第二ミルチアの二局に引き渡して、
それから休暇の予定だったのに――

シオン：ふふ、船長みたいなこと言って。まあ、済んだことばやいても始まらないでしょ。
とにかく、本社に状況を連絡して、指示を仰ぎましょう。

アレン：はあ――しばらくは、ここの連中と一緒にすることか。やばいよなあ――

シオン：なに、どういうこと？

アレン：なんか怪しかったんで、この船の船籍調べたんですよ。
連中、クーカイ・ファウンデーションの関係者ですよ。
まずいですよ、あそこは。異能者[ミュータント]の巣窟って噂じゃないですか。

シオン：あー、人種的偏見。

いい、アレンくん？

たしかにクーカイ・ファウンデーションはミルチア自治政府によって設立された
特異な武装組織ではあるけど、それは戦後処理が片づくまでの話。

現在の形態になってからは、真っ当な一財団として運営されてるんだから。
設立の経緯上、武装化は解除されていないけれどね。

アレン： く、くわしいんですね、主任。

シオン： 私だって、ミルチア自治州の出身だもの。

——原種保護法制定前の被害者たちを保護して、
ひとつにまとめた現在の代表理事の手腕は、地元でも高く評価されてるんだから。
なんだっけ名前、えーっと——

ケイオス： ——ガイナン・クーカイ。

シオン： あ、そうそう！ ——ケイオスくん、どうしたの。

ケイオス： いや、なにか手伝えることはないかと思って。

シオン： ありがとう。でも、もう終わるところよ。

ケイオス： そっか。あれ、ここに残ってるカレーは——

シオン： あ、それ中佐の——

アレン： そういえば、中佐——来てなかったですね、食事。

シオン： ——ちゃんと呼んだのに。いいわ、私が温めなおして持っていくから。

ケイオス： それがいいね。ところで、彼女——KOS-MOSは？

シオン： KOS-MOS だったら、フィッティングルームに置かせてもらっている
調整槽で再調整中、あと数時間にかかるかな。

あ、もしかして、話し相手になってくれるのかしら。だったら嬉しいな？

ケイオス： いいの？

シオン： もちろん。

ケイオス： ありがとう、じゃお先に。

シオン： うん、よろしくね。

フィッティングルーム

ケイオス： ————

————

————

——やっと会えたね。

————本当の君は、どこで眠っているんだい。

――――
――――
――お休み。

アンドリュー：誰かいたようだが――気のせいかな。
こいつは――あの時の元型[アーキタイプ]なのか。

⇒ [サブストーリー2：アンドリュー篇](#)

食堂

シオン：さ、中佐にも持って行ってあげようかな。

フィッティングルーム

シオン：！ 中佐――

どうしたんですか！

アンドリュー：よ、抑制剤が――右ポケットに――

シオン：このアンプルですか？ これ、いったい――

アンドリュー：た、頼む――はやく――

シオン：は、はい！

アンドリュー：はあっ、はあっ――

シオン：大丈夫ですか――

アンドリュー：さ、さわるな――！

シオン：――！

アンドリュー：――す、すまん――

――助かった。

シオン：あ、あの――船室にもいなかったから。

――えと、お腹すいてるんじゃないかなーとか――――

アンドリュー：――――

シオン：なに――してたんですか？

アンドリュー：――こいつを、見ていた。

シオン：KOS-MOSを？銃を持って？

アンドリュー：こ、これは――癖だ。

シオン：そっか、軍人ですものね。私も一人知ってます、そういう癖の人。

もうずいぶん昔に退役したんですけど、いっつも刀を持ってニヤニヤしてるんですよ。
危ないと思いませんか？

アンドリュー：そ、そうだな、刀は――危ないな――。

グノーシスを掃討するアンドロイド――とてもそうは見えないな。

シオン：ええ。――どうぞ。

アンドリュー：あ、ああ――

シオン：――この子、兵器なんですよ。これでも。

アンドリュー：そうだろうな――バージル中尉と言ったか、彼はこいつの戦闘アルゴリズムに殺されたんだろう。

シオン：――――

アンドリュー：君を責めてるわけじゃない。理論、理屈――人はそれで殺されていく。
よくある話だ。

シオン：この子があんなことをするなんて思ってなかった――

アンドリュー：基礎理論は君が組んだんだろ？

シオン：ええ、一応――私の娘――友達かな、そんな風に思っていたのに――

アンドリュー：そうか――どのみち中尉は、あの状況では助からなかった――と思う。

シオン：ありがとう、気遣ってくれて。――綺麗に食べてるんですね、さっきから――

アンドリュー：ん？あ、ああ――性格さ。後付けだがな。

シオン：――――

あの――ヴォークリンデにはなんで乗ってたんですか。

アンドリュー：なぜ、そんなことを聞く？

シオン：――なんとなく。あそこの部隊の空気と中佐って違っていたから。

アンドリュー：俺はもともと、艦隊勤務ではない。それに軍人だからな、いろいろある。

シオン：軍人――ですか。

じゃあ、私――これ片づけてきますね。

食堂

シオン： ちょっとブリッジの様子も見に行ってみようかな。

ブリッジ

オペレーター『今日は、当U.M.N.転移ゲートをご利用いただきありがとうございます。

お客さまがたの船籍登録を読み上げさせていただきますが、

所属はクーカイ・ファウンデーション、船種は第二種貨物船、

船番号MFHE-59824751、船名エルザ、船長はマッシューズさまでよろしいでしょうか。』

トニー： OK、あってるぜ。

オペレーター『では、フライトプランを転送してください。』

ハマー： はいはいはいっと。送ったっすよ〜。

オペレーター『拝見しますー貨物は廃船部品、目的地はミルチア太陽系圏ー

あ、貨物重量がちょっとオーバーしていますね。』

マッシューズ： たらふく集めすぎたんでね。

オペレーター『クーカイ・ファウンデーションへの請求が割増になりますが、よろしいでしょうか?』

マッシューズ： ああ、かまわねえよ。

オペレーター『かしこまりました。では、よい旅をー』

ハマー： やっぱり言われちゃったっすね。

マッシューズ： いろいろ拾っちゃったからな。

シオン： ヲェクター[うち]に回してくれって言ってもよかったんですよ。

マッシューズ： 言えるか!どこでお前さんたちを拾ったって、説明すんだよ!

アレン： あ、なるほど! 艦隊の残骸あさりに行ってたなんて、言えないですもんねえ。

マッシューズ： ーハイパースペースに放り出すぞ。

ハマー： これ以上、ややこしいことはごめんっすよ。

トニー： そうそう!

小惑星プレロマ 

アンドリュー『し、司令ー』

マーグリズ： ーアンドリューか、連絡が途絶えていたのはどういうことだ。

アンドリュー『はっ、申しわけーありません。ゾハルはーその、グノーシスにー』

マーグリズ：もうその件については、報告を受けている。

アンドリュー『で、では少佐は無事に！ーあ、いえ、申しわけありません。

ですが、百式をー百式プロトタイプを確保しました。現在、ジャンカーの貨物船の中です。

行き先はミルチア太陽系圏、プレロマで一度確保したモノと同一かとーそちらではー』

マーグリズ：余計なことはするな。

アンドリュー『はっ、ですがー』

マーグリズ：分相応の行動をしろと言っている。すべての事象は確認済みだ。それにあわせて、状況も進行中なのだ。

アンドリュー『で、ではー』

マーグリズ：即刻帰投しろ。処分はそれからだ、いいな。

発信元の船籍を照合、アンドリューのマーカーを追跡しろ。

オペレーター：はっ。

???：偉くなったもんだな、マーグリズ。飼い犬も少しは大事にしてやらんといずれ手を噛まれるぞ。

ーくくくく。

マーグリズ：アルベド・ピアソラー貴様か。

アルベド：百式プロトタイプを連邦のサイボーグに奪回された失態が、そんなにみっともなかったか？

可愛い飼い犬の前では隠しておきたかったか？

キルシュヴァッサー：プロトタイプーモモ。

アルベド：いいんだぜ、俺が奪い返してきてやっても。

あれは俺にとってもー必要なモノだ。

マーグリズ：貴様が？

アルベド：ここのザコどもに任せるよりは確実だと思うぞ。

オペレーター：！

アルベド：いいねえ、その剥き出しの敵意！その矛先でこの俺を貫いてくれよ！ーふっふっふ、ふははははは！

マーグリズ：ーーー

アルベド：案ずるな。あんたの邪魔はしない。目的は一緒ーだろ。

マーグリズ：ー好きにするがいい。

アルベド：このプレロマに、プロトタイプが――桃[ペシェ]がいなくて、安堵したか？

キルシュヴァッサー：――――

アルベド：そんな高度な感情など、あるわけがないか。なあ、人形よ。

偽りのキルシュヴァッサーよ！

キルシュヴァッサー：――――

ペレグリー：あの男に任せて大丈夫なの？

マーグリス：任せてはいない、だが利用価値はある。それだけだ。